

コミュニケーションとしてのセクシュアリティと女性の知的障害者

——坂口安吾の『白痴』を素材として——

生 瀬 克 己

目 次

1 はじめに

2 身体障害者のノウハウとアイデンティティをめぐって

3 障害者のセクシュアリティをめぐって

4 坂口安吾の『白痴』における「伊沢」と「オサヨ」について

5 おわりに

1 はじめに

「われ想うゆえにわれあり」

哲学者デカルトが言ったとされる言葉である。「理性」の意味を強調するという意味で、障害のない人たちのノウハウを見事に定式化したものに思える。「理性」の存在を前提として、「言葉」「論理」「追体験」といった手段や方法によって学習し、自己の理解や行動をあらわすことを意味しているからである。このように考えるとき、この言葉は、障害者、とくに知的障害とともにある人びとと、そうでない人びとの間にある決定的とも見える「相違」を最も明瞭にあらわしていると思える。障害のない人びとと同様の「理性」ある存在とされる身体障害者の場合であっても、その「行動」や「表現」の

仕方において、自分に独自の、あるいは、障害のない人たちとは異なるノウハウを創出する必要がある場合も少なくない。たとえば後に紹介するアメリカの進化生物学者ヒーラット・ヴァーメイの足跡がしめすような「独自のノウハウ」を工夫しなければならない。そして、その工夫の可能性の大小が「障害の程度」と理解されることも少なくない。知的障害者や精神障害者の場合であれば、デカルトが定式化してみせたような「言葉」「論理」「追体験」といった方法・手段で学習を重ねることは容易なことではない。知的障害者は、「言葉」「論理」「追体験」といった方法・手段ではなくて、彼らは具体的な体験や経験の積み重ねによって学習していく。精神障害者の場合であれば、発症以後においては、障害のない人たちと同じやり方で学習を積み重ねることはむづかしい場合が多い。

現代における社会モデル（またはノーマライゼーション）の理論は、障害者について「対等の市民」としての社会参加を根拠づけている。しかし、それぞれの障害者がかかえる上記のような相違は、それぞれの障害者がある地域社会において「対等の市民」となっていく道程をより複雑なものにするにちがいない。要するに、障害のない人たちの方法・手段がはばをきかせすぎていると言え、言い過ぎになるのだろうか。

こうした結果、身体障害者と知的障害者では、同じ障害者という地位にありながら、その社会的処遇においては、大きな相違をもたらすことになってしまっている。筆者の最終的な問題意識からすると、こうした障害者間にある相違をふまえたうえで、障害のない人たちと対等な存在となっていくための道筋を獲得することにある。

そのための第一の作業として、障害者が「対等の市民」として参入していくための「工夫」の流通過程を考えてみることにしたい。障害のない人たちが社会と生活の基幹部分をにぎってしまっている現実の社会において、それぞれの障害者が駆使しうる方法・手段は、どのような扱いを受けることになっているのかを考えることにもなる。

さらに、もうひとつ、説明しておきたいことがある。1970年代に始まって、

1981年の国際障害者年以後の障害者の地域社会への参入運動は、たとえば「福祉の街づくり」と表現されたことから分かるように、地域の商店や道路や建物のバリアーをかなり解消させた。それらは、身体障害者が「社会参加」する機会を増加させ、その結果、身体障害者と障害のない人びととの接点を増大させた。こうした変化は、身体障害者と社会を変えた。以下に、具体的に示そう。

ベストセラー『五体不満足』の著者乙武洋匡氏はその障害観について「太っている人、やせている人。背の高い人、低い人。色の黒い人、白い人。そのなかに手や足の不自由な人がいてもなんの不思議もない」¹⁾と語り、障害者を「『血の通った』社会を再び構築しうる救世主となるのが、もしかすると障害者なのかもしれない」²⁾と位置づけている。さらには「ある意味で障害とは傲慢な人間に歯止めをかけ、優しさや支え合いといった本来の人間性へ回帰させようとする宇宙の仕掛けではないかを感じる場面がたびたびある」³⁾として、障害者に現代の人間社会を変革する主体的な役割を担わせようとしている。乙武氏だけがこうした考え方をしているのではない。脳性マヒとともに38年生きてきたという松兼功氏も自らの障害のある身体を嘆いたり卑下したりというようなことはないとしたうえで、「それどころか、わずらわしさを含めて障害によっていかされ、毎日の出来事に喜怒哀楽する生活を誇りにしている。そのままの自分を受け入れ、愛しむ『障害力』となるだろうか。それは、時と場合に応じて変幻自在に『渉外力』『生涯力』、神秘の世界を知る『象外力』へ変換するエネルギーにもなるのだ」⁴⁾と述懐している。あるいは、ろう者たちも、自らに自信をとりもどしている。そのことは、木村晴美・市田泰弘の両氏が「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」⁵⁾と語って「ろう文化宣言」をしたところに、最も端的に現れている。

こうした身体障害者たちの主張を聞いていると、自らのアイデンティティを確立しているだけでなく、「障害がある」という自らの現実のなかに現代社会がかかえる課題を変革していく可能性をさえ確信している。このように、

個人が変身しただけでなく、社会の方も変わった。社会の側の変化は、政府刊行物である『障害者白書』(95年版)が現在では障害者との共生の考え方が定着しているとしたうえで、「『共生』の考え方を更に一步進めたのが、障害者自身や障害者に理解の深い人達の間で広まってきている『障害は個性』という障害者観である」⁶⁾と語っているところに、何よりも明瞭に現れている。

思い返してみると、この国では、ほんの数十年前までは、その心身に障害があることは「諦観」と「絶望」のシンボルであった。それを思うとき、現代の比較的若い障害者たちの上記のような変化はきわめて重要である。しかし、上記のような障害者観が総体としての障害者におよんでいるとは言いがたいところに重大な課題が残されていることも忘れてはならない。すなわち障害者との共生という考え方が定着していると言えるとするなら、それは身体障害者を中心とする世界についてであって、たとえば、知的障害者や精神障害者については、その共生思想は不十分にしか行き渡ってはいないと見える。たとえば、知的障害の女性は、今も「施設」や「職場」等において、レイプに近い危機にされされている。あるいは、地域の母親たちの集まりにおいて、知的障害児の母たちはしばしば除外されたりしている。こうした重大な差別は、後にくわしく紹介することになる茨城県水戸市で起こった「アカス事件」において、被害に遭った知的障害女性の証言を裁判所が採用しなかったところに現われる。そして、その採用しなかった理由について、事件を担当した副島洋明弁護士は「捜査機関や裁判所によって証明された事実とは何か、という問題があります。ただひとつ、確かにいえることは、警察官および検察官はその虐待の被害者である当事者（知的障害者）を知ろうとはしていません。取り調べた取調官が作成した調書、被害者を観察した報告書等、言葉・表現力としての問題、要するに上手に話せない、具体的で正確ではない、言っている内容が聞き方で変わってしまう、おどおどして明確でない、論理的に一貫していない、矛盾している等の理由から、今の司法制度にはのれない人だとして『却下』しています」⁷⁾と説明している。副島弁護士が「私は、上

手に論理的に矛盾なく表現できなくても、その心に刻まれた記憶・体験・表情、とりわけその当事者の人間性・誠実さこそが事実を証明する大切な判断材料だし、その意味で、私は検察官に否定された事実をも真実だと考えています」⁸⁾と主張するようなことの実現は、現実の社会のなかでは、その可能性さえ見つからない。あるいは、障害のない人たちの間では、副島弁護士発言の趣旨さえ理解されがたいのかもしれない。しかし、副島弁護士が言うようなことが実現しないとすると、知的障害者たちが「対等の市民」として社会に参入していく道は、大きく閉ざされることになってしまわざるをえないのである。

このような現実が放置されてよいはずはない。そこで、本稿においては、障害者たちが、自己のアイデンティティと存在感を回復していくためのいくつかの課題について検討することにしたい。まずは、アメリカの盲目の進化生物学者ヒーラット・ヴァーメイを事例にして、身体障害者の場合を検討する。つづいて、坂口安吾の小説『白痴』を素材にして、女性の知的障害者の場合を検討する。この文学作品を素材にするのは、この作品が障害のない男性と知的障害の女性とのセクシュアリティが重要な部分をしめており、知的障害の女性がかかえるディスコミュニケーションは、男女のセクシュアリティを介するとき、最も端的に現れてくると思えるからである。

上記の事柄についての検討を通じて、障害者とそうではない人たちとの間によこたわるいくつかの課題を提起したいと考えている。

2 身体障害者のノウハウとアイデンティティをめぐって

本来の意味での「障害者との共生」が実現できるとするなら、障害者とそうでない人との間を「断絶させない」ことが必須の条件となる。このような条件が満たされたとき、障害者は、彼らをとりまく社会や人びとと円満な関係を取り結ぶことができる。

それが身体障害者の場合であれば、失明者には点字、ろう者には手話、下肢障害者には車いす、発語に障害のある人にはコミュニケーターといった、

それぞれの手段が講じられ、それらが社会的に認知されないかぎり、身体障害者は「対等の市民」にはなれない。この場合、身体障害者が「対等の市民」として処遇されないとすれば、その「障害者の能力」もまた不十分にしか認知されないことになる。

そうした点をアメリカの進化生物学者の経験を参考にしながら検討しておきたい。

アメリカの進化生物学者ヒーラット・ヴァーメイの伝記⁹⁾によると、彼は3歳のときに失明した。子どものころから「ぼくは貝類学者になる」¹⁰⁾と言っていた。そして、子どもの彼を指導した教師は「この盲目の少年も、慎重に考えて自分の限界をわきまえた仕事に落ち着くだろう…。そういった言葉が口から出ることもなく、そのかわりに、心からの励ましが惜しみなく与えられた」¹¹⁾という。彼の両親は彼を「能力と責任をもつ家族の一員として扱った」¹²⁾。だが、彼が本格的に生物学者をめざしたとき、まわりは「生物学ほど視覚が重要な分野はほとんどなく、いずれにせよ委員会（資格審査にあたる盲人委員会のこと…生瀬）が数年にわたって実施した一連のテストは、私が博士号に手が届かないかもしれないことを示していると指摘した」¹³⁾という。そして「ウィリアムズ大学のような小さな文系の大学に行くべきだ」¹⁴⁾と助言したという。

実際には、彼はプリンストン大学に入学して、ヨーロッパイガイの殻の形態的多様性に関する卒業論文を書き、エール大学でイモガイに関する博士論文をめざすことになる。やがて、彼が大学教員の職を求めようとしたとき、ふたたび「盲人委員会の担当者の疑念」¹⁵⁾が彼を苦しめることになる。すなわち「盲人の能力を完全には信じない」¹⁶⁾周囲の人びとに悩むことになる。さらには、博士論文の作成過程において、ジャマイカ北岸でのフィールドワークを計画したとき、「生物海洋学のプログラムに提出されたすべての提案を審査した委員会は、盲人にはフィールドワークはできないと結論した」¹⁷⁾という。

しかし、彼自身は周囲が「安全確保」という名の障壁を設定をしたとき、

彼自身は別のことを感じていた。すなわち「私の安全を重視する善意の意見に従っていたら、私にはわからないままだっただろう」¹⁸⁾とふりかえっている。

そのうえで、彼の学問に必須の貝殻の観察について「私はほかの人よりもよく貝殻を観察しているとはいえないし、貝殻の特徴に基づいて他の軟体動物学者よりも簡単に種のちがいを区別できるというつもりもない。各々の観察者は自分の科学に独特な見方を持ち込むものだが、私も例外ではない。物体を指先やつめ、細い針で調べることで、輪郭だけでなく、不注意な観察者が見落としやすい、数、相対的な大きさ、彫刻の要素の方向、巻き貝の殻口を取り囲む歯や突起の位置、二枚貝の殻の鋸歯のパターンと非対称性などの詳細についても知ることができる」¹⁹⁾と自己分析している。

ヒーラット・ヴァーメイの語るところを聞いていると、身体障害者の場合には、その障害ゆえの周りの人びとや社会のシステムとのディスコミュニケーションに出会っている。しかし、結果的には、そのディスコミュニケーションを回避する方法・手段を自ら見つけだしている。そして、自分の手段・方法を周囲に認めさせている。そうすることで、自力でやれることをしめしている。

3 障害者のセクシュアリティをめぐって

障害者のなかでも、知的障害者の女性がかかえているディスコミュニケーションは、セクシュアリティをキーワードとすると、そこでの課題が最も端的で、明快に現れてくると思える。その分析にはいるまえに、その予備的な作業として、障害者をめぐるセクシュアリティについて検討しておきたい。

障害者をめぐる諸課題を考えると、そのセクシュアリティという側面を忘れることはできない。セクシュアリティとは異性同士の関係であれ、同性同士の関係であれ、それは互いの身体を用いたより直接的なコミュニケーションを意味する。そして、よりプライベートな関係であることも確かなことであろう。こうした基本的なことは障害者の場合も同様であるが、他方で、

障害者であるがゆえに、円滑にはいかない場合も少なくないようである。それどころか、セクシュアリティの専門家のなかには、障害者のことをそうではない人と同じ比重で論ずることを忘れているかに見える人もいる。

たとえば、性教育の専門家である村瀬幸浩氏は、障害のない男女のセクシュアリティについては、「性を下半身のこととして、卑しむという価値観」²⁰⁾の存在が問題であると、まことに適切な視点をうちたてたうえで、弁護士の渥美雅子氏とのディスカッションにのぞんでいる。そして、男女のセクシュアリティに関する重要な論点をいくつも提示している。だが、障害者のセクシュアリティとなると、そうした扱いになってはいない。

(前略) ご存じのようにオランダはセックスワーカーを公認していて、いわゆるプロスティチュート(売春婦)——次第にセックスワーカーと言うようになりつつありますが——から税金を取り、また年金も支給するというシステムを持っている国です。ところが障害を持っているためそうした施設を利用できない人たちの要求——こうした人たちを看護・介護する人のなかには患者の性的欲求の切実さを身をもって体験している人がいる——があり、それに応える形で障害者の家を訪れて性的なサービスをする、というのです。もちろん自主的にそうした活動に応ずる人によってですが。

性的なサービスといっても何も性交だけをさすのではなくて(性交できない人も当然いるわけです)、体を撫ぜたり、添い寝をしたり、射精を手助けしたり、お喋りしてほめあったり(後略)²¹⁾

といった事例が紹介されているだけである。全身性の重度の男性障害者が議論の対象にされているらしいことはわかるが、これでは、障害の種類さえわからないし、男女の違いによって、こうしたサービスの提供に相違があるのかどうかもわからない。こうした「半端な」議論は村瀬氏だけではない。たとえば、自らも障害者である小山内美智子氏も、似たような議論をしている。小山内氏は「二十四、五歳になっても見合いの写真はこない。性の喜びをだれも声を張りあげて要求はできない。障害が重くなればなるほど、チャンス

は遠ざかる。みんな我慢しているだけなのである。(中略) 障害者のセックスをなぜタブーにするのか。それは障害のない人が触れたくない、見たくないという意識から生まれるのだと思う。目も耳もそらさないで聞いてほしい」²²⁾と訴える一方で、自身が性に関する著書を出版したことの意味にふれて「もっともっと多くの障害者が性の問題を訴えるための呼び水になったらいいなと思ったんですが、なかなかそういう本は書かれない。知的障害者の性なら、施設の職員たちが経験談を記すことはあっても、本人は書けないし」²³⁾など主張している。障害者の側からこうした主張を聞いた障害のない人たちは、その言辞の切実さに引きずられてしまって、これが障害者のセクシュアリティだと思ってしまう人がいるかもしれない。しかし、筆者には疑問が残る。施設の職員によるマスターベーションのサポートといったことが知的障害者のみに限られるとは、筆者には信じられない。そのことはさておくとしても、そして、「性的欲求の充足」ということが重要な課題であるとしても、そこにいきつく道筋には、障害者を取りまく諸関係が継続的に確保され、そこから、性的な関係にいたるような関係もまた生まれるとの基本を忘れてはならないだろうし、原則的には、障害者といえども、こうした基本的な関係の外側においてはなるまい。このように考えるならば、諸種の日常的諸関係のなかで、障害者、とくに重度の障害者が不十分にしか参入できていない社会状況の結果として、「性的欲求の充足」にいたりうるような関係を獲得できないでいることが少なくないということになるのではないだろうか。先の村瀬氏や小山内氏の言う「障害者の性」の切なさは、それほどに社会や人びとから孤立させられている障害者の切なさをしめしていると考ええる。

上記のような「孤立」、や「無理解」のなかにあって、女性の知的障害者のセクシュアリティをめぐる「思い込み」や「偏見」はさらにはげしい。それを考えるために、ひとつの事件をしめそう。

1995年10月、茨城県水戸市のアカス紙器という会社で、知的障害者の女性の事件が発覚した。ここに働く知的障害のサチコという女性が社長の手で、事実上、レイプされたというのである。このサチコの言うところによると、

彼女は「社長さんに無理やりズボンを脱がされて、後ろから嫌らしいことをされたんです。痛かったんです。『声出すんじゃねえ』って言われて、嫌だと言ったけど、どうしても逆らうことができなかった。古い寮の時は社長の部屋でも、同じように布団の中で全部脱がされてやられたんです」²⁴⁾ というような被害を訴えたのである。しかも、被害者サチコの「嫌だと言った」ことが事件の加害者に通じなかっただけでなく、彼女のまわりの第三者にも理解されず、無視されてしまったのである。この被害女性が訴え出ても、警察でさえも「障害者本人の調書だけでは足りない。第三者の証言が必要だ」²⁵⁾ というような対応しかしなかったのである。知的障害者の言葉は信用できないと決めつけているのである。筆者の目には、まさしく、「差別」そのものと映るが、障害のない人びとの社会では、そうは見えないのだろうか。

4 坂口安吾の『白痴』における「伊沢」と「オサヨ」について

知的障害の女性が「レイプの被害者」としてではなく、一個の女性として、異性である男性と向かい合ったとき、そこに展開されるであろうセクシュアリティとは、どのようなものになるのだろうか。言葉をかえて言えば、セクシュアリティを介して知的障害の女性と向かい合った障害のない男性は、どのようなコミュニケーションを取るようになるのかという問題でもある。

このような課題を検討するのに、坂口安吾の『白痴』という作品を選ぶことにした。アジア・太平洋戦争の末期という時代状況のなかであって、「伊沢」という男性と「オサヨ」という知的障害の女性が出会う小説だが、全編、「伊沢の内的世界」のほかは、「伊沢とオサヨの二人だけの世界」と「戦争の恐怖」しか描かれていない。そのことが、かえって、本稿の課題には好都合のように思えるのである。

まずは、この小説のストーリーを紹介しておこう。

現在、27歳の伊沢は新聞記者をへて、今は文化映画の演出家をしている。彼は彼の周りにいる新聞記者や文化映画の演出家たちを軽蔑している。彼らは時代の波に乗り遅れまいとしているにすぎず、芸術の独創性や、個性の独

自性といったことを忘れていると、伊沢には思えるからである。伊沢の方は、この芸術の独創性や、個性の独自性といったことを大切にしたいと考えている。伊沢の住む下町には、肺結核の病人や精神障害者のほか、実に多種多様な、社会の底辺に押しやられた人たちが暮らしている。伊沢と性的関係を持つことになるオサヨという知的障害の女性は、現在、25、6歳で、伊沢の隣家に住む精神障害の男性の妻であって、姑のヒステリー的な対応におびえている。ただし、この知的障害の女性は、（伊沢のところが）いわば彼女「オサヨのこと…生瀬」の待避所になっていて、彼女がこの待避所にいるときは、たいがい、隣家で「オサヨさんオサヨさんと呼ぶ婆さん「オサヨの姑のこと…生瀬」の鳥類的な叫びが起り」²⁶⁾というような形で、読者にこっそりと、彼女の名前が伝えられるだけで、作中では、きちんと、彼女の名前が使われることはない。

ある夜のこと、伊沢が帰宅すると、彼の部屋の押し入れに、このオサヨが隠れていた。この日、明け方まで彼女と過ごした伊沢は、彼女との「性関係」を結ぶことになる。ところが、伊沢にとっては、オサヨは「性欲の権化」としか映らないし、彼女の精神的な側面については、「死への本能的恐怖」があることしか伊沢には理解できない。4月15日の夜間空襲をオサヨとともに逃げのびた伊沢は、彼女との深い共感と連帯感を感じるのだが、無事に逃げのびてみると、彼女は深い眠りのなかにいるばかりなので、伊沢は彼女の姿に再び絶望してしまう。結果、伊沢は、自分の人生の先行きのすべてを戦争の破壊にゆだねることにして、明日もオサヨとともにいることを考えているところで、物語は終わる。

伊沢とオサヨの巡りあいは、実に、不思議で、奇妙なものである。本稿が水戸のアカス事件を素材に紹介した事実上のレイプといったことでは勿論ないし、それだからといって、異性同士の新たな出会いといった趣などもない。さりとて、熱く愛し合う恋人同士といった風情もない。二人の最初の出会いは次のようなことであった。

（前略）あかりをつけると奇妙に万年床の姿が見えず、留守中誰かが掃

除をしたということも、誰かが這入ったことすらも例がないので訝りながら押入をあけると、積み重ねた蒲団の横に白痴の女がかくれていた。

男性のひとり暮らしの部屋が掃除され、万年床が片付けられている情景のなかで、オサヨの「好意」ぐらいいは伊沢にも分かりそうなものだが、彼はそういう感じ方をしない。オサヨの「自分自身の思いつめたことだけをそれも至極漠然と要約して断片的に言い綴っている」といった態度のゆえに、伊沢は「多分叱られて思い余って逃げこんで来た」と理解するのみであった。というわけで、異性同士のセクシュアルな関係の成立というよりは、どちらかという、オサヨの「保護者」というスタンスに伊沢は立つ。すなわち、彼は「白痴の女の一夜を保護するという眼前の義務」を果たさなければならないと考えたのである。

したがって、この知的障害者オサヨの「保護者」としての伊沢は、「私はあなたの身体に手をふれるようなことはしない」と宣言はするのだが、オサヨが「『私はきらわれている』としょげかえる姿」をみて、伊沢はオサヨが「伊沢の愛情を目算に入れていた」とさとり。つまり、伊沢はオサヨに「愛」を告白されたのだ。

しかし、伊沢にしてみれば、オサヨとは、これまでに4、5回、顔をあわせたことはあったが、せいぜい挨拶をかわす程度の付き合いしかなかったし、オサヨが知的障害者であることを思うと、伊沢はオサヨの告白をどう理解すべきか、とまどうばかりであった。他方、オサヨは実に明快に「伊沢への愛情」を告白している。しかし、それは伊沢には、まったく、理解されない。伊沢の方は「オサヨの障害」しか理解できないからである。伊沢には、オサヨのなかに「生の情熱を託するに足る真実なもの」を見つけられなくて不満なのである。

障害のない人たちのなかだけにわが心身を置いてきたであろう伊沢であってみれば、彼が理解できるオサヨは、その「障害」のみであったに違いない。それもマイナス・イメージにあふれた障害観であったことだろう。それだから「オサヨの人間としての部分」や「オサヨの心」を感じたり、考えたりす

ることは、まったくできなかったのだろう。伊沢のこうしたあり方をいくらか一般化してみるとすると、障害のない人にとっては、それほどに、障害者の「障害」が大きな部分をしめているということであろう。それだから、障害者の「障害以外の部分」、たとえば、その人の性格や人格などに思いをめぐらしてみるといようなことは思いもよらなかったのだろう。

いずれにしても、オサヨの側からすれば、伊沢は彼女の「人間の心」の部分を見てはくれない。したがって、彼女の「真意」が伊沢に伝わるはずもなく、ましてや、彼女が望んでいたかもしれない本来のコミュニケーションなどは達成されようはずもない。それでも、オサヨにしてみれば、彼女の夫と姑のところにいるよりは、伊沢のところにいる方がはるかに「まし」だったと思える。オサヨは彼女の精神障害者の夫とはほとんどコミュニケーションがとれず、他方ではヒステリックに姑に追い回されるだけであった。そうであってみれば、オサヨは「ひとりきり」の孤独に近いなかにいたに違いない。それにくらべると、伊沢はいつも「彼女の身近に」いてくれる。伊沢はオサヨの内面世界を理解してはくれないけれど、少なくとも、彼女に襲いかかってくる「戦争の恐怖」から救ってはくれる。現に、4月15日の空襲のときには、一緒に逃げてくれたではないか。

伊沢の方は、オサヨに対しては、不満ばかりである。その不満の原因については、200円という給料の安さゆえの生活不安にあるのか、いつ解雇されるとも知れない雇用不安にあるのか、それとも、彼自身の「芸術を夢みて」いるせいなのか、いずれとも、それは分からない。そんな伊沢のオサヨへの印象は、

この白痴の女は米を炊くことも味噌汁をつくることも知らない。配給の行列に立っているのが精一杯で、喋ることすらも自由ではないのだ。まるで最も薄い一枚のガラスのように喜怒哀楽の微風にすら反響し、放心と怯えの皺の間へ人の意志を受け入れ通過させているだけだ。二百円の悪霊すらも、この魂には宿ることができないのだ。この女はまるで俺のために造られた悲しい人形のようにではないか。伊沢はこの女と抱き合

い、暗い曠野を飄々と風に吹かれて歩いている、無限の旅路を目に描いた。

というようなものでしかない。オサヨという「名前と呼ばれる」ことさえない。ここまで言われてしまっただけは、もはや、伊沢はオサヨのパートナーとはなりえないということかもしれない。伊沢の目には、オサヨの「障害ゆえにできないこと」しか見えてはいない。

伊沢は、オサヨがご飯を炊けない、味噌汁をつくれないと強調している。それからすると、伊沢は、性別役割分業に基づく女性観を絶対化しているのかもしれない。そうであるとする、伊沢はマイナスの障害者イメージのほかに、絶対化された性別役割分業意識をも持っているわけで、オサヨの良さを理解できる可能性はますます小さくなっていく。

現実には、この物語のなかでは、オサヨの内心は、ほとんど描かれない。それは、まるで、知的障害者には、内心などありえないとでも言っているかのようである。かりに、このような仮説が成り立つとすれば、このような障害者観がこの物語のなかで、最も、歪んでいて、差別的なところだということになる。有り体にいえば、原作者のそうした障害者理解自体が「時代」のせいというべきかもしれない。そして、このような障害者観の存在は「この作家」に固有なわけではなく、この物語が世に出た時代には、かなり一般的な見方としてあったことを指摘しておくべきかもしれない。その意味では、戦後間もない時期に発表されたこの『白痴』という小説と同じような時期に世に出た吉屋信子の『安宅家の人々』²⁷⁾における知的障害者安宅宗一の方が、希有の例に属するのかもしれない。『安宅家の人々』のなかで安宅宗一は小桜学園の岩井園長の教育を受ける。その岩井園長は安宅宗一を「智能不幸にして普通人の標準に劣り欠陥ありといえども、性甚だ温順、快活、愛情の念発達し、一切の邪惡の氣質全く無く、他人の毀誉褒貶を意に介せず、自らを守る本能皆無にして他人の為に自己の幸福を犠牲にする宗教的觀念を有す」²⁸⁾と評している。小説『白痴』の障害者像とは大きく異なる。そのことはしばらくおくとしても、小説『白痴』においては、オサヨの内心は語られ

ないのだから、彼女の状況や真実は分からないとしか言いようがないというのが現実ではある。

しかし、オサヨが姑にヒステリックに追い立てられて、おびえているらしいことは、この物語にも描かれている。それは彼女の寂しさや戦争の恐怖を癒してもらえそうもない周辺状況のなかにいることを意味していよう。そうだとすると、オサヨにとっては、自ら愛する伊沢がいつでも抱きとめてくれる、爆撃の恐怖から助けてくれる、彼女にとっては、それだけで、今は十分に価値のあることではなかっただろうか。他者と共にいる孤独ほどに苦しいものはないのだから。だが、伊沢の方は、あいもかわらず、すさまじい。伊沢がオサヨとの性交関係を持ったときも、彼は、決して、好印象を持たない。

その日から白痴の女はただ待ちもうけている肉体であるにすぎずその外の何の生活も、ただひとときの考えすらもないのであった。常にただ待ちもうけていた。伊沢の手が女の肉体の一部にふれるというだけで、女の意識する全部のことは肉体の行為であり、そして身体も、そして顔も、ただ待ちもうけているのみであった。驚くべきことに、深夜、伊沢の手が女にふれるというだけで、眠り痴れた肉体が同一の反応を起し、肉体のみは常に生き、ただ待ちもうけているのである。眠りながらも！けれども、目覚めている女の頭に何事が考えられているかと云えば、元々ただの空虚であり、在るものはただ魂の昏睡と、そして生きている肉体のみではないか。目覚めた時も魂はねむり、ねむった時もその肉体は目覚めている。在るものはただ無自覚な肉慾のみ。それはあらゆる時間に目覚め、虫のごとき倦まざる反応の蠢動を起す肉体であるにすぎない。伊沢の口から語られる「忘れ得ぬ二つの白痴の顔」のうちの一つが上記の部分である。そこでは、オサヨの意思の存在は徹底して否定される。そして、それが伊沢の「うんざり」をかたちづくる。

見方を変えれば、伊沢が自分のウンザリぶりを強調するオサヨの「表情」や「所作」も、彼女の安心感や信頼の大きさをあらわしている見えなくもない。伊沢の手がオサヨにふれたときの彼女の敏感きわまりない反応も、オ

サヨの伊沢への思いの深さをしめしているのかもしれない。だが、伊沢には、そのようには理解されない。彼には、オサヨのすべては「魂の昏睡」「生きている肉体」としか映らない。

知的障害の女性を「魂の昏睡」「生きている肉体」と決めつけて、その性欲の強さを強調しようとする障害者観は、決して、この物語のなかだけのことではない。現実にも生きている。先に、「水戸・アカス事件」のことを紹介したが、この会社の社長にレイプされた知的障害の女性が、ことが終わったあとに、「オメエはこういうことが好きなんだから」との言葉をあびせられている²⁹⁾。それだけではない。過去には「性欲が強すぎる」「性の抑制がきかない」といった理由で、知的障害のある女性の子宮が、病気でもないのに、外科的に摘出されてしまうというような事件がいくつもあった。こんなことを考えると、物語のなかの伊沢の認識は、リアルな現実とも重なってくるのである。

それでも、あえて、伊沢の心境に弁護すべき何かをさがすとすれば、オサヨがセクシュアリティに含まれるであろう「文化」と呼ぶべき部分をまったく持ち合わせていないということかもしれない。たとえば、「精神のエロス」を解説してみせた専門家が「愛でさえ、激しいが一過的な性愛より、情愛となったほうが安定した関係を結びうる」³⁰⁾と説明している。こうした説明からすると、オサヨのセクシュアリティは、少なくとも、伊沢にとっては「激しいが一過的な性愛」にかたよりすぎているということになるのかもしれない。それが、伊沢をいらだたせていると考えられなくもない。たとえ、そうであったとしても、このようなセクシュアリティにおける「文化の部分」は、カップルの間での「相互啓発」が可能はずだから、オサヨにこの「文化の部分」が欠落していたとしても、その責任のすべてをオサヨに押しつけるというわけにもいくまい。あるいは、見方を変えていうなら、作中人物伊沢がかかえている時代的制約からすれば、「セクシュアリティの場面では女性は『謹み深く』あるべき」というような意識を持っていて、それが「オサヨのセクシュアリティ」を素直には受け取れなくしているというようなこともあっ

たかもしれない。しかし、それとて、オサヨだけの責任ではあるまい。

伊沢のこうした「うんざり」ぶりを考えていると、オサヨは、どうして、何がよくて、日々、伊沢と暮らしているのかというような疑問もわいてこよう。たしかに、オサヨにとっては、伊沢はベストではないし、ベターでもない。しかし、「最悪」ではないとは言えるのではないだろうか。たとえば、次のようなことを言う人がいる。「人間には三大欲ともいうべき三つの中心的な欲望がある、食欲、性欲、そして人と一緒にいたいという一種の集団欲だ」³¹⁾としている。こうした見方にしたがうとすれば、オサヨはこの「三大欲」を獲得できたことになりはしないだろうか。

事実の問題としては、伊沢とオサヨの間に確かな「共感」と「連帯」が成立するのは、4月15日の、あの猛烈な空襲に追われて、まさに命からがらに逃げまどうという、「生命の瀬戸際」というような、まさに最後の瞬間においてだけであった。あえて、言ってしまうえば、セクシュアリティなどは無用であり、したがって、そこでの「文化」も「意思」も必要としないような、ぎりぎりのところでしか「二人の共感のあるコミュニケーション」は成立しなかった。

このように考えるとすれば、伊沢は、オサヨに対して、これほどに「うんざり」しているにもかかわらず、なおリアルな事実としては、オサヨとの「性関係」は継続している。伊沢には、オサヨとの「性関係」を拒絶した形跡はない。むしろ、こちらの方が奇妙に思えてくる。伊沢の側からするなら、オサヨとのいかなる共感も、コミュニケーションも成立していないことの方が多かった。それでも、オサヨとの性関係を伊沢は拒絶しなかった。そうだとするなら、そのような伊沢のセクシュアリティをこそ、どのように考えればよいのかという疑問が残ってしまう。

5 おわりに

先に紹介した失明の進化生物学者ヒーラット・ヴァーメイも、オサヨもともに障害者である。その意味では、両者は共通の立場にあるはずだが、現実

の社会にいる身体障害者と知的障害者の間には、大きな「へだたり」があった。どのような立場にある障害者も、自らの存在をささえるアイデンティティを確保できなければならない。そのうえで、どの障害者も、自らの諸活動を可能にするノウハウを開発し、持ち合わせている。けれども、それらは、現実の社会のなかでは、誰にでも、どこでも、承認・受容されるわけではない。

そのことは、先述のところからも分かるように、身体障害者ヴァーメイの工夫とノウハウは結果的には承認され、受け入れられている。他方、知的障害者の場合には、そう簡単には承認も、受容もされない。さきに紹介した水戸のアカス事件の被害女性が、レイプ同然の性を「拒絶」しようとしたとき、彼女の声は無視されたままだった。このことが、身体障害者と知的障害者の間にある決定的な「相違」をあらわしている。

この決定的な「相違」をもたらしているのが、人びとや社会のなかにある、知的障害者に対する「思い込み」や「偏見」と深く関わっている。このことは、はっきりと理解しておかなければならない。事実としては、どのような障害者にも、コミュニケーションのためのそれなりの工夫はある。たとえば、「ほとんど言葉もなく、ジェスチャーはもちろん、その他のコミュニケーションをもたないかのようにみうけられる15歳の男子」であって³²⁾、彼の心身の現実が「I Q 15、診断名は脳性小児マヒ後遺症と言語機能喪失、既往歴てんかん発作、唾液分泌昂進等」³³⁾をかかえているというようなケースであっても、当の少年は自分の「放屁」によって彼の周りに存在感をアピールし、周囲の人びととのコミュニケーションを試みていることが、障害児施設の職員によって報告されている。具体的にいうと、彼の「放屁」の意味性が発見され、「本児のオナラは1つの生活の知恵から生じているのではないかと思量される。すなわち、これが本児の心象表現の1つであることが考えられるので、いろいろのパターンを設定して、彼の行動観察を試みた」³⁴⁾結果、「大きい集団とのコミュニケーションを持ちたい」、あるいは「『自分もここにいるのだ』という自分の存在を認めてほしい」³⁵⁾という願望を満たすためのもの

であったという。

こうした事例を見ていると、どのような障害者にも、それなりのコミュニケーション獲得の工夫が有効になされていて、それとして周囲に受容されるなら、意味あるものとして機能するものであることが分かる。ただ、障害者である彼・彼女のこうした工夫が周囲に常に受容されるとは限らないことが、障害者の側からすればバリアーになるだけのことである。

上記のことを念頭においたうえで、「知的障害者のオサヨと伊沢」の関係を考えてみよう。知的障害者オサヨは、どうやら、精神障害者の夫との夫婦関係をふくめた身の回りの諸関係を良好には構築できなかったらしいことは、どうやら、確かなことである。

そのような状況のなか、オサヨにしてみれば、伊沢のところへ飛び込んだのは、彼女のこうした「現実」から「抜け出す」ための「行動」との意味を持つことになる。オサヨの場合、彼女が知的障害者であるために、障害のない人とはコミュニケーションのとり方が異なる。しかし、それなりに、彼女が望む関係は構築されていく。すなわち、第一には、オサヨは伊沢に「異性としての好意」をいただいているが、それを「現実の関係」に変換させている。それは「伊沢との性的関係」の獲得を意味する。というわけで、オサヨにしてみれば、一応は目的を果たしたことになる。

しかし、伊沢の側では、まったく、事情は違ってくる。特に、セクシュアリティの場面では、両者は相当、極端に異なる。男性である伊沢の目を通しての叙述であるから、全面的に信用するわけにはいくまいが、オサヨには明確な不満はないことになっている。それに対して、伊沢の方は、オサヨに対する不満でいっぱいである。彼はオサヨを「生きている肉体」は持っているが、その精神は「魂の昏睡」と言うにひとしいとまで言い切る。それは障害のない人が行使しているような精神の営み（つまりは理性の営み）を「持たない」としてオサヨをうとましく思っているのだ。つまり、セクシュアリティの場面でのオサヨの「奔放で自由な表現」に伊沢は狼狽しているのだ。その原因が「オサヨの障害」にあるのか、それとも女性に「謹み深さ」を期待す

るような彼の女性観のせいなのか、あるいは、その両者が重なり合っているのか、すべては不明のままである。

それから、問題は別のことになるが、セクシュアリティや結婚ということをめぐる、伊沢の時代と現代との「時代的相違」も忘れることはできない。現代ならば、性教育の専門家村瀬幸浩氏が、

あのね、結婚ってしなければならないものじゃない。所詮、人間はひとりで生まれてひとりで死んでいくんでね。ひとりで生きることが基本だよ。自立っていうとずいぶんむずかしいことみたいだけど、つまりひとりで生きていける力をもつことと考えてみたらいい。そして、社会とか国とかがなすべきことは、いろいろ人みんながそれぞれひとりで生きていけるようにさまざまな条件を整えることなんだと思う。で、ひとりで生きていけるけれど一人では淋しいから二人で生きたらもっと楽しいのではないか。限られた人生だから何とか二人で楽しく生きていこうと思った人同士、合意したときに同棲とか結婚とかということが二人の課題になってくる（後略）³⁶⁾。

と解説しているようなことになるのであろう。障害者の場合も、あらゆる意味での福祉資源が十分に確保され、人びとや社会との出会いやコミュニケーションが確保できたならば、村瀬氏が言うような生き方ができないものでもあるまい。しかし、オサヨと伊沢を考えるうえでは、このような時代ではない。オサヨと伊沢が生きた時代と現代とは、あまりにも違っている。

オサヨと伊沢が生きた時代においては、女性は「生活のための結婚」を考えねばならず、障害者には現代のようなノーマライゼーションや社会モデルの思想のバックアップはなく、親や家族をあてにして、その人生を切り開いていくのが精々のところであった。

現代の目で見るとき、オサヨに対する伊沢はあまりにも差別的に見える。だが、それも上記のような時代のせいであることは否定できない。こうした時代的特質からすると、障害者オサヨと障害のない伊沢が「対等な関係」を結ぶなどということは、もともと容易なことではないと言った方よいのかも

しれない。それはそうであるとしても、オサヨは伊沢とめぐりあい、共に暮らしたことで、以前にはなかった「何か」を獲得した可能性は十分にある。

というのは、障害のないひとは、相手の言葉や文字による理屈をもとにして、考えたり、学習したりしていく。だが、知的障害者の場合には、「具体的な体験」や「具体的行為の反復」によって学習していく。

物語のなかのオサヨと伊沢は、ほとんど、「ふたりだけ」で暮らしている。伊沢以外の人間がしょっちゅう出入りしているような形跡はまったくない。人間関係が固定的で、安定している。オサヨのこうした伊沢との関係は、セクシュアリティを含めて、きわめて具体的で、くりかえし反復されている。これは、現代社会の有り様とはまったく異なっているが、オサヨには有利なものになりうる。そして、4月15日の爆撃を伊沢と共に逃げのびた体験にしても、オサヨに真の「信頼」や「共感」といったものを、言葉や理論によってではなく、具体的にあじわった実感にささえられたものとして蓄積されている可能性も高い。

オサヨのこうした学習の結果は、すぐには見えてはこないにしても、オサヨを豊かにしたに違いないだろう。他方、伊沢の方は、4月15日の空襲を逃れたあと、これ以上はないであろう安心感のなかで眠っているオサヨを見て、また、もとの「魂の昏睡」と感じてうんざりしている。だが、たとえば、伊沢とのセクシュアルな関係がそうであったように、オサヨにとっては、この4月15日の爆撃から逃げる経験もまた、きわめて、具体的で、実感に満ちた連帯感を実感できる経験の連続であったに相違ない。オサヨが何をまなび、何を蓄積しているかは明示されないけれども、伊沢と出会う以前のオサヨと同じではなくなっている可能性は高い。

ところが、伊沢の方はというと、オサヨと出会う以前も以後も、オサヨの障害に対する見方も、女性観もまったく変化していない。

このように考えてくると、ふたりの暮らしの結果、オサヨが何がしかの「飛翔」をもたらすかもしれない体験を重ねていたかもしれないのに対し、伊沢の方には、何の変化もない。今のところ、オサヨに何の兆しもないけれ

ど、「伊沢の思ったこともないオサヨ」となってたちあられるかもしれない可能性をひめている。そのように「変貌したオサヨ」は伊沢にどう対するのか。あるいは、新たなオサヨに出くわしたとき、伊沢はどうするのか。それらは、まったく、物語の外側に置かれていて、予想もつかない。

注

- 1) 乙武洋匡『五体不満足』257頁。講談社 1988
- 2) 同上書95頁。
- 3) 同上書95頁。
- 4) 松兼功『ショウガイノチカラ』245頁。中央法規 1999
- 5) 木村晴美・市田泰弘「ろう文化宣言」(『現代思想』青土社)。1996年4月
- 6) 『障害者白書』(95年版)12頁。
- 7) 副島洋明『知的障害者・奪われた人権——虐待・差別の事件と弁護』43-44頁。明石書店 2000
- 8) 同上書44頁。
- 9) ヒーラット・ヴァーメイ著・羽田裕子訳『盲目の科学者——指先でとらえた進化の謎』。講談社 2000
- 10) 同上書18頁。
- 11) 同上書19頁。
- 12) 同上書28頁。
- 13) 14) 同上書63頁。
- 15) 16) 同上書118頁。
- 17) 同上書145頁。
- 18) 同上書171頁。
- 19) 同上書260頁。
- 20) 村瀬幸浩・渥美雅子『性愛対話』17頁。柏書房 1999
- 21) 同上書220頁。
- 22) 小山内美智子『車椅子で夜明けのコーヒー——障害者の性』11頁。ネスコ／文芸春秋 1995
- 23) 伏見憲明著『性の倫理学』183頁。朝日新聞社 2000
- 24) 「水戸・アカス事件」, 毎日新聞社会部取材班『福祉を食う』20頁。毎日新聞社 1997

- 25) 同上書41頁。
- 26) 『ちくま日本文学全集・坂口安吾』p245-290頁所収による。以下、同じ。筑摩書房
1991
- 27) 吉屋信子の『安宅家の人々』。毎日新聞への連載のあと、同社から1952年に単行
本化された。
- 28) 同上書17頁。
- 29) 毎日新聞社会部取材班前掲書57頁。
- 30) 中岡成文「精神のエロス」(原田平作・溝口宏平編『性のポリフォニー——その実
像と歴史をたずねて』60頁。世界思想社 1990
- 31) 石橋正浩『なぜ、人間はセックスするのか』59頁。なあぶる 1998
- 32) 33) 宮川雄賢・清水和「重度精神薄弱児の心象表現——放屁とその訴え」(『精神
薄弱の研究——施設における』第8集所収) 16頁。日本精神薄弱者愛護協会,
1974
- 34) 同上書19頁。
- 35) 同上書21頁。
- 36) 村瀬・渥美前掲書31-32頁。

The Disabled Heroine in “*HAKUCHI*” [The Idiot] by SAKAGUCHI Ango

Katsumi NAMASE

This article considers the sexual relationship between a woman with an intellectual disability, Osayo, and a young man, Izawa, in the 1946 novel *HAKUCHI* by Sakaguchi Ango.

Near the end of World War II, a couple begin to meet alone in the man's room. The woman, a wife in his neighborhood, admits her love for him, but he cannot understand her feelings because her disability makes it hard for him to get to know her. He imagines that she has run away from the scolding of a mother-in-law, and decides to take care of her.

Nevertheless, he begins a sexual relationship with her. Yet he feels that her soul is dead, and that her body is a lump of sexual desire. He is disgusted with her, although she loves him seriously. With one exception, she cannot communicate her feelings to him: that was when they were forced to flee from the Tokyo air-raids, when he felt her will to live. Once they are in safety, he finds, he cannot understand her. WHY? That is the subject of this article.